

## 会 釈

街を歩いていると、向こうから隣の家のご夫婦がやってきます。すれ違いざまに、にっこり笑ったり、小さく礼をしたりします。これを「軽く会釈をする」とか「会釈を交わす」と言いますが、この「会釈」は、もとは仏教の言葉なのです。

この言葉は、「和会通釈」という仏教の言葉を略したものです。

「和会通釈」とは、互いに矛盾するように見える考え方を照らし合わせ、共通する部分を見だし、ひとつにまとめていくことをいいます。

これは大変難しい作業です。それぞれの考え方を細かく分析し、共通点を発見、それを足がかりにして、矛盾点を一気にまとめあげていく力が求められるからです。

これが、「会釈」と略した形になり、事情を理解する、という平易な意味に変わっていきました。

やがてそれが、相手の気持ちを考慮し、心配りをするという意味になり、思いやりや愛敬へとつながり、現在私たちが用いている軽い仕草を表す言葉になったと考えられます。

今の「会釈」は、人間関係をなめらかにするための潤滑油といった意味合いで使われていますが、もとをたどれば、矛盾したものをひとつにするという、仏教のとても難しい知的作業に行き着くのです。

「会釈」は、全身全霊をこめた対話から生まれるものなのかもしれません。

## 看 病

家族や親しい人が、病気になった時、私たちは、氷枕を替えたり、おかゆを作ったりして、病人のお世話をします。これを「看病」といいますね。

お坊さんの呼び方の一つに「看病者」というものがあります。看病をする人ということです。お坊さんのあり方を、そう喩えたわけです。

この場合の病気とは何でしょうか。

それは、生老病死の苦しみです。その苦しみを抱えている人を病人に喩え、お坊さんは病人のお世話をし、苦しみを和らげ、病気を治す人であるということです。

お坊さんが処方する薬は、仏教の教えです。その薬を服用するということは、仏教

の教えを理解し、それを<sup>ぎょう</sup>行<sup>ず</sup>ることです。薬を服用した病人の苦痛は<sup>やわ</sup>和らぎ、病気が治っていきます。

その間、「<sup>かんびょうしゃ</sup>看病者」であるお坊さんは、その人に適切なアドバイスをし、寄り添い続けるのです。

こうしてみると、お坊さんの呼び名のひとつである「看病者」は、病人のお世話だけではなく、病気を治すお医者さんの役割も含まれているようです。

お釈迦さまのことを、医者<sup>いおう</sup>の王様「<sup>ゆえん</sup>医王」と呼ぶ所以です。